

歌人のスポーツ感性

薄葉 茂

ことし二〇二二年は二度目の夏季東京五輪があった二〇二一年以上に、スポーツの当たり年である。新型コロナウイルス禍によって、当初は二〇二〇年に予定されていた東京五輪が異例の一年延期となったため、世界的なスポーツ大会のスケジュールがことしに集中した。無観客開催となった東京五輪閉幕の半年後のことし二月には冬季北京五輪がやはり無観客で行われた。その四か月後の六月には水泳の世界選手権が開催され、七月には陸上の世界選手権があり、十一月から十二月にかけては五輪と並ぶビッグイベント、ワールドカップ（W杯）サッカーのカタール大会が予定されている。

世界がコロナ禍に見舞われてから、もう三年目。日常生活が取り戻せない中にあっても、ウクライナに侵攻した大口ロシア抜きで、世界的なスポーツ大会が続々と、かつ淡々と繰り広げられている。身近なところではプロ野球、プロサッカーJリーグ、大相撲、高校野球などがコロナ禍の逆風を受けながらも開催されている。もはやスポーツは社会経済活動と表裏一体で、日常生活の指標とも言える。個人にとっては、見たり体験したりすることが日々の楽しみごとであり、生きがいだと言う人もいる。こうしたスポーツについて詠まれた

歌は「社会詠」のジャンルに入れられることがある。

歌人たちはどんなスポーツに心を寄せ、どう表現してきたか。それぞれの歌からにじみ出る感性をあらためて味わってみたい。まずは、ことし十一月にW杯があるサッカーの歌を取り上げる。

ホームなれば失点ののちも揺れつづく青の
波動のこの包囲網 春日井建『朝の水』

Tシャツの胸にあさつての青空を収ふ少年
ら声あげつづく

この二首は歌集の「宮城スタジアム即事」と題する二十一首に含まれる。時と場所は、二十年前の二〇〇二年六月十八日、宮城県利府町にある宮城スタジアム。観戦したのは、W杯サッカー日韓大会の決勝トーナメント一回戦、日本対トルコだった。作者は四万五千を超える大観衆の一人として、雨のスタンドにいた。

サムライブルーのユニホーム姿のサポーターを詠んだ一首目に、臨場感と作者の興奮が込められている。失点してもめげず、むしろ勢いづくサポーターの力強さを「波動」と受け止めた。二首目は試合後のスタンド風景。日本が敗れたにも

かわらず声を上げ続ける少年たちは、雨の中で明日どころか、「あさつての青空」を胸に抱いているという。世紀の一戦を見終え、心晴れやかに、そして頼もしげに、未来ある若者たちを見守る姿がほうふつとする。当時、作者は咽頭がんを患っており、歌集は死去の直前に刊行された。

ボール一つ追ひて人間集団が走る・ぶつか
る・爆ぜる・散る・走る 高野公彦『雨月』
零敗の試合なれどもわが四肢を灼きし九月
の太陽に謝す

ほろほろと肺よりいづるあつき風疾走のの
ち草にいこへば 『淡青』

この高野公彦の三首は観戦ではなく、作者が実際にサッカーをした時のことを詠んだ。一首目は自分が当事者でありながら、十一対十一のプレーヤーの姿を「人間集団」と俯瞰的に捉える描写が印象的だ。「レ」でつながれた五つの動詞が、一つのボールを追い、奪い合うという単純かつ、エキサイティングなスポーツの醍醐味を連続写真のように表現しており、ドリブル突破、競り合いといったサッカー用語では味わえないスピード感がある。ボールゲームは点を取ったり、取られたいりして勝利に執着するからこそ面白いが、たとえ二首目のように「零敗ゼロの試合」で敗れても、力の限りを尽くした上での結果なら、太陽に思わず感謝したくなる。三首目では胸がはち切れんばかりに酸素を吸い込み、走り回った後に吐く息を「あつき風」と実感する。こんなに苦しい思いをしているのに、草むらに横たわると、すがすがしい。肉体の限界に挑

んだ充実感が残れば、草サッカーでもアスリートである。
若乃花左おつつけ ひねるやうに技をかけ
れば驚きがくる

池田はるみ 『短歌エッセイ お相撲さん』
これらの世に裸一貫 ほのぼのと力士を思へ
ばうつくしきかな

ああ力士いいな裸で孤独にてつねにおのれ
を曝したたかふ 岩田正『泡も一途』
負けまじき横綱孤独の四股を踏むはだかと
裸のこころさらして

歌壇随一の好角家、池田はるみは相撲短歌のエッセイ集を二十年前に刊行している。特徴があつて気になる力士の名前を挙げつつ、技についても詠む。一首目にある「若乃花」は弟の横綱貴乃花とともに、若貴兄弟として知られる二代目横綱若乃花。作者は玄人好みの技を堪能しながら詠む。「おつつけ」は若乃花の代名詞とも言える技。まわしをつかみにくる相手の腕を外側から絞り上げて重心を浮かせ、その懐に入つて低い姿勢で優位に攻める。当時台頭した横綱曙ら大型力士に対抗する小兵横綱ならではの知恵で、今は似た体格の若隆景が得意にしている。二首目は「裸一貫」の二句切れと、「うつくしきかな」の詠嘆が、身一つで闘いの土俵に立つ力士の潔さを思わせる。

三首目、四首目は淡々として、ユーモラスな表現で知られる作者の相撲詠。土俵上の力士という存在に憧れを抱くかのようだ。「裸」「孤独」「おのれを曝し」では、力士にとつて

ごく当たり前のことでも、自分の人生になぞらえれば、そんな生き方は到底できないという思いがにじむ。負けられないことが宿命づけられた横綱の土俵入りを見れば、なおさらだ。見方は人それぞれであり、二首目の「ほのぼのと力士を思へば」と比べると、哲学的でもある。

土俵は俵に囲まれた直径十五尺（四・五五メートル）の円。裸の大男たちが狭い舞台でぶつかり合い、土俵内外の土が先に付いたら負けの単純な勝負を繰り返す。そこには欧米生まれの競技のようにゲームとは言えない、日本らしい美しさ、寂しさの同居する世界がある。

左手には飲、右手には食ありて拍手は顔の筋肉でする

大松達知『ゆりかごのうた』

キャッチャーフライ捕らんとしたるサトザ

キのミットの金の色が見ゆ

市民らがなけなしの金を投げ入るる樽募金にて息つぎし鯉

桑原正紀『秋夜吟』

カープ・ファンを名告ればたいいてい苦笑され憐れまれたり上京ののち

「プロ野球」は「プロの野球」を意味する言葉と思われるが、報道上は米国のプロ野球が「米大リーグ（メジャーリーグMLB）」、日本のプロ野球が「プロ野球（NPB）」と使い分けられていて「日本のプロ野球」「プロ野球」である。試合開催時の飲食物の提供やグッズ販売などを含む興行は娯楽としてすっかり定着し、セントラル（通称セ）リーグ、パシフィック（通称パ）リーグの各六球団はおなじみだ。

大のロツテファンである作者の二首目は試合を見ながら飲食するという、二つの楽しみを味わう様子がかがえる。飲食を「おん」「じき」と読んで表現すると、仏教的な意味合いから、お釈迦様の両手のようだ。米大リーグとは違って、日本流、アジア流の観戦で外野席は立ち上がったままの鳴り物応援が繰り返られるので、作者がしているのは内野席かバックネット裏席。顔の筋肉をする「拍手」は「声援」をする時の口の動きか。もっともコロナ禍にある今はできないが。

二首目で作者は、ロツテの里崎智也捕手が「ミットの中の金色」という個性的な色の野球道具を使っていることに着目した。なぜ作者にはそれが見えたのか。捕手以外の野手は飛球が自分に向かってくるので、斜め上に向けてグラブを構えるが、捕手はファウルなどがほぼ真上から落ちてくるため、手の平で拾うようにミットで捕る。バックネット際で果敢にボールを追う里崎捕手の闘志あふれるプレーが作者は好きで、普段からミットの状態や中の色まで注視しているのだ。

現役引退後に里崎さんは、作者が選者を務めていたテレビの短歌番組にゲスト出演している。ロツテのユニホーム、帽子姿で座る作者の脇で、ジャケッポ姿で緊張ぎみに話す里崎さんの表情が印象的だった。

三首目、四首目は元高校球児でもある作者の郷里の球団、広島への愛があふれる連作の中から引いた。広島といえば、赤ヘル（ヘルメット）のカープ（鯉）。鯉は出世魚で広島県を流れる太田川の特産、広島城が鯉城と呼ばれることなどから愛称が付けられた。スポンサー企業名ではなく、地名をチ

ーム名とする球団は他に比べて財政面で劣るが、養鯉のごとく、獲得した新人選手を長い目で育てようという意識が強い。また、市民球団として地域に愛され、人々が樽に身銭を投げ入れて鯉を養う気概を持っている。一方で、かつてプロ野球の中心は圧倒的に大都市を含む首都圏、近畿圏、中部圏だった。今でこそ、パは移転などで地方の札幌、仙台、福岡に球団があるが、セでこの三圏以外の球団はいまだに広島だけ。

一九七五年に「赤ヘル軍団」がリーグ初優勝を遂げるまで、ファンは弱小の悲哀を味わった。それだけに鯉の滝登りのような戦いぶりを見せるとき、地域は沸き立つ。NPBが発足してから七十年あまり、企業論理が優先される面もあるが、いつの時代もやはり、ファンあつてのプロ野球である。

ジャンプ台を跳び立ちし影転生の輝きに充ち雪に着地す 栗木京子『綺羅』

一日中雪山に滑り疲れなしスキーは板に乗ってただけで

奥村晃作『スキーは板に乗ってただけで』

一首目はスキージャンプの動作を詠んだ。北京五輪のノーマルヒルで小林陵侖選手が金メダルを獲得したシーンが記憶に新しい。スキー板を翼にして跳び、雪面に着地する姿に「転生の輝き」があるという。覚悟を決めて助走路を踏み切る選手がその瞬間、生まれ変わるように感じた。小林選手の師で五十歳の現役ジャンパー、「レジェンド（伝説）」こと葛西紀明選手は「飛ぶのはいつも怖い」と言うが、別世界に飛び出すような競技に取り組む選手は輝き続ける。スポーツに

良い意味での因縁は、なぜかつきまとうもので、小林選手が快拳を成し遂げた日は、ちょうど五十年前の札幌五輪で「日の丸飛行隊」と呼ばれた笠谷幸生さんから日本の三選手が、同じ種目の表彰台を独占した日と同じ二月六日だった。

二首目で作者が一日中スキーをしても疲れないのは、単純で簡単なスポーツだからではなく、楽しいからである。葛西選手の長い競技生活を支えるのは「好きなことをやっている」という気持ちだ。スキーを別の競技名に入れ替えても同じだろう。スポーツにおける「好きこそもの上手なれ」の方程式を、作者は板に乗るだけで確立した。

一度ひとたびにて再びはなきたたかひの渾身の勝ち、渾身の負け 三枝浩樹『時禱集』

つひにわが踏むをえざりし甲子園の土をかき入れある敗者たち 竹山広『眠つてよいか』

暑い夏の象徴とも言える夏の高校野球。負けてしまえば、その時点で、日々の苦しい練習に耐えてきた競技生活が終わってしまう。一首目の「渾身」は二度とない高校生の夏にこそ、ふさわしい言葉だ。勝者、敗者とも全力でぶつかり合う姿がすがすがしい。二首目の作者は長崎での被爆体験を詠み残したことで知られるが、甲子園出場を目指した元球児だった。旧制中学時代、長崎・海星の選手として県予選で優勝した後、北九州予選で敗退し、涙をのんだ。気持ちを詠んだのは七十年後の最晩年。スポーツに打ち込んだ青春の日々を振り返る気持ちに至るまでの長い歳月を思うとき、平和の尊さをかみしめずにはいられない。